

主体的に学び、思いを伝え合う児童の育成
～学び合いのある授業づくりを中心として～

1 主題設定の理由

令和3年度の研究の振り返りの中で挙げた課題の中に、以下のようなものがあった。

- ・話合いで、以前は「いいです」という反応が主であったが、授業研究会を機に取組を見直し、それ以外の反応が使えるようにすることで、出された意見を吟味する態度が向上した。
- ・ホワイトボード等を活用したグループでの協働や、「ジグソー法」等の必要感のある学び合いで、児童が主体的対話的に学ぶことができた。
- ・ディベートを行い、個々の考えを述べることはできたが、考えを広げ深める話合いには到達しなかった。
- ・「伝える」ではなく「伝え合う」のイメージを教職員および子どもたちで共有するとよい。
- ・Teams への投稿で、話し合うのとは違う学びの交流の様子が見られた。

これらから浮かび上がることは、教職員間で、そして児童とも「伝え合う」「共みがき」によって学びを広げ、深めるよさを共有し、これまでの実践を生かしながら具体的な方法を探り、実施し、それを共有・検証することが、学校教育目標達成のために求められるということである。そこで標記のような主題を設定した。

なお、「学び合い」「協働的な学び」の充実のためには、「個別最適な学び」の充実も不可欠であり、その一体的な充実をめざす。

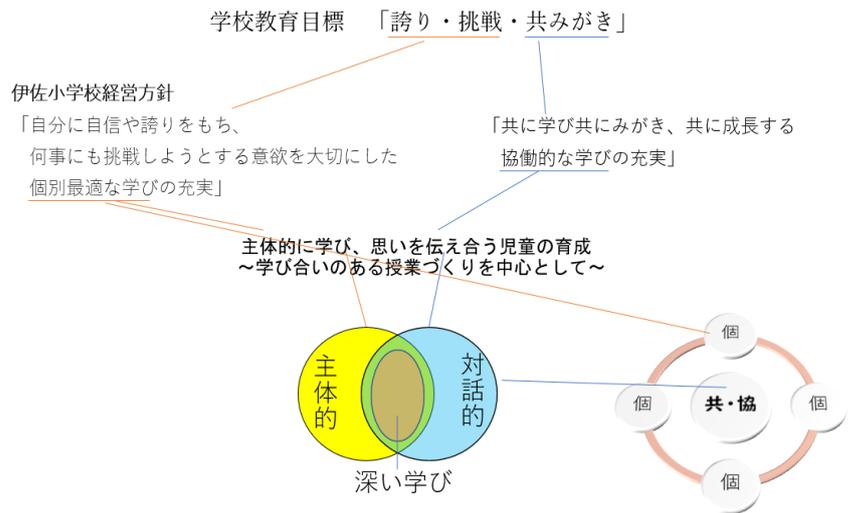


図1 研究主題 概念図

2 目指す児童像

① 主体的に学ぶ子

- ・「やってみよう」という関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組む子。
- ・自己の学習を振り返り、「もっと学びたい」「今度はこうしよう」と次につなげる子。

② 思いを伝え合う子

- ・思いを言語で書く、図に描く等して相手に見せたり、伝わる話し方で話したりする子。
- ・相手を見て最後まで聴き、リアクションする子。 ・友達の話につなげて話す子。
- ・「どういうこと?」「こういうこと?」等と訊く子。

3 研究のあり方、組織

主体的に学び、思いを伝え合う児童とは具体的にどのような姿か。なぜそのような学びが重要か。そのためどのような手立てを行うか。それにより、児童の育ちはどのようなようであったか。まず前者を年度初めに共有し、後者について1年間かけて追究していく。そして、より深い研究を実現するために、以下のとおり改善を図る。

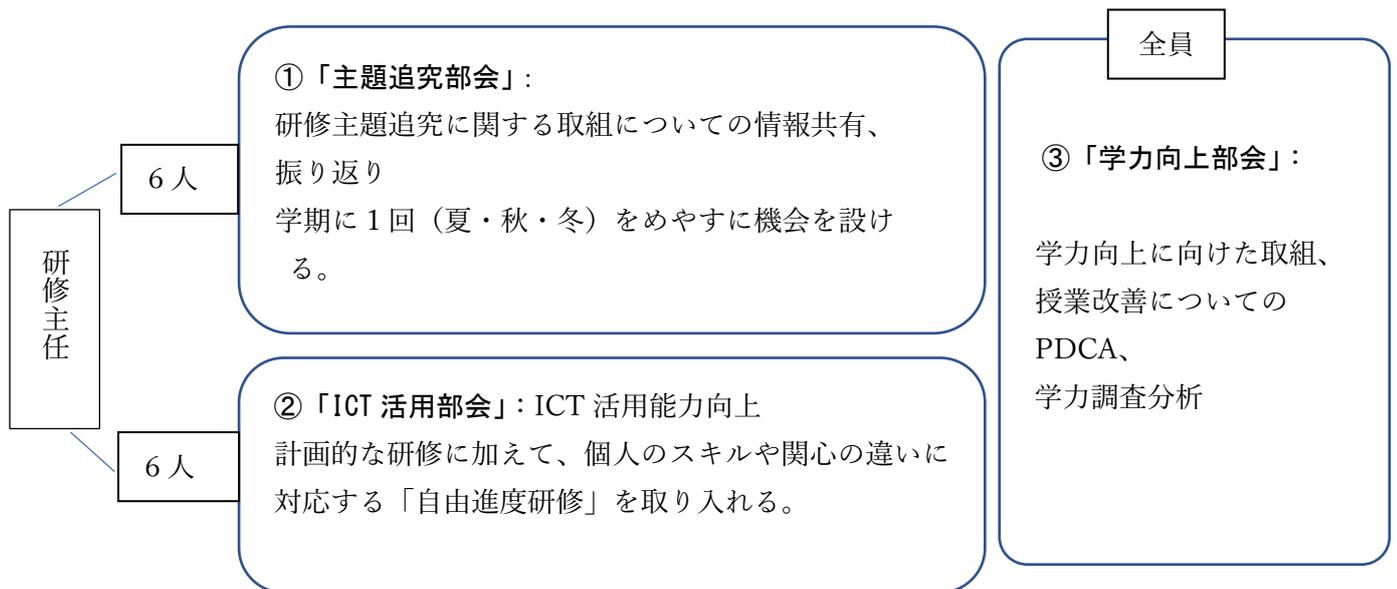
A 授業研究会 (1人1授業。年3回の全員参加の公開授業「ユニット型研修会」を含む。)

授業研究会を、イベント的にせず、「普段の授業を見合い、じっくり協議する」ことを実現するため、以下のとおりとする。

- ・ 指導者は、特に教職員からの希望がある場合以外は招聘しない。
- ・ 本時案のみでもよい。総案の代わりに、本時までの児童の学びの過程が分かる付属資料があるとよい。
- ・ 事前の指導案検討会は、全体では行わず、基本的に管理職、研修部、隣学年担任とで行う。
- ・ ユニット型研修会以外は、授業参観評価プリントを記入し、授業者に渡す。(別紙)
- ・ 事後のまとめは、A4半分程度で、「成果」「課題」「本時以降に改善したこと」を、箇条書きでまとめる。それを次回の校内研修会の冒頭5分で発表する。

B 部会

各部会所属メンバーは、協議の場で、実践等を中心的に発言する。



4 評価

- ① 主体的に学び、思いを伝え合う必要性やイメージの共有ができたか。
学び合いを意識して授業づくりをしているか。 → 教員アンケート (奇数月)
- ② 具体的にどのような取組ができたか。 → 同上
- ③ 児童が、主体的に学習していると実感しているか。思いを伝え合っていると実感しているか。
→ 児童アンケート (毎月)

5 研究の実際

(1) 中心テーマ「学び合い」の必要性および児童の姿のイメージ共有

学び合いのある授業づくりの必要性および目指す児童の姿を、年度初めに共通理解した。その具体的なイメージをまず教職員が一層広げ深めようと、夏季休業中にも研修を行った。

「伝える」よりも「伝え合う」を目指し、「ただのおしゃべり」「浅い学び」ではなく「深い学び」のある学び合いを実現するための手立てとして、【目的】を明確にして授業に学び合いを位置付けることの重要性を確認した。「学び合い」と一言にいても、全体での話合いの前にペアで意見交換をして「自信をつけるため」のペア活動もあれば、問題を解き終わった児童が他の児童に教える活動、とりあえずペアで話しながら意見を「作る」話合い、グループや全体で「広げる」「練り上げる」「絞る」話合い、また、ジグソー法のように比較的複雑で時間をかけて行う活動もある。授業に位置付ける際や協議する際の参考となるように、【目的】【形態】によって整理した資料を用意した。

(2) 授業研究会

第6学年 算数科「立体の体積」

単元内自由進度学習について、教諭が自ら広島県廿日市市立宮園小学校にて視察したことや、美祢市の有志教員で教材の共同作成、情報交換をしてきたことを土台とした実践であった。

学び合いという面では、『学力が比較的高い児童が他の子に教える』以外のやり取りの方が、主体的で深い学びにつながるのではないかと提案があった。自由に作ったグループのメンバーは、理解度が同じくらいの児童同士のものが多く、相談しながら課題に取り組む姿や、必要に応じて友達や教師に質問しながら進める姿が多く見られた。

主体性という面では、「学習の計画書」を基に自分でPDCAサイクルを回すことが、学習意欲を高め、自己調整能力を高める鍵となっていることについて、協議会で多くの意見が出た。

地域の方からも「どの児童も一生懸命な、よい授業だった」との感想があり、いわゆる「お客様」になっている児童が1人もいないことを象徴するものであった。

また、教師が、そのような学び合いや主体的な学び方のよい姿を、授業の冒頭や振り返りの際に具体的に価値付けることが、学び方の定着を支えていたことも確認された。協議会では美祢市教育委員会の指導主事にも講話をしていただき、この授業研究会をきっかけに、単元内自由進度学習への教職員の関心が高まった。



図2 学習計画について児童への助言

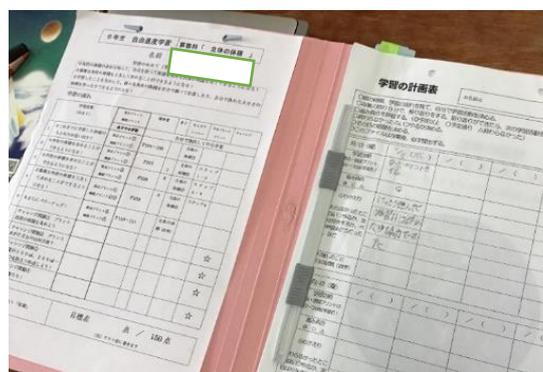


図3 「学習の計画書」



図4 学び合う児童

(3) 伝え合う力を高めるための指導の工夫

各教室にある掲示物を改めて見つめ直した。系統性があり洗練されたものであることが分かった。これと併せて「伊佐小中学校学習規律指導プラン」や、小学校学習指導要領解説【国語編】を改めて見たところ、「目的、意図」「話をつなぐ」「中心」「比較しながら」「考えをもつ」といったキーワードがあり、本校の掲示物と概ね重なっていた。6年間の系統性の中の担当学年のめあてを、各教職員が改めて意識しその後の指導に当たった。

6 成果と課題

年度当初に共有した「目指す児童像」のうち、特に①自己の学習を振り返り「もっと学びたい」「今度はこうしよう」と次につながる子、②「どういうこと?」「こういうこと?」等と訊く子について児童の姿の中に見ることができた。そして、特に自由進度学習の研究を通して、教師の授業観、学び合い観を問い直すことができたことが成果である。

課題は、このような姿をより多くの場面で見られるようにすることである。例えば、算数科の自由進度学習以外の授業でも、児童同士で考えを深められるような学び合いのある授業づくりをしていきたい。また、自由進度学習においても、身に付いた学び方を他の学習にどう生かすかや、他教科への応用、異学年合同学習の可能性も視野に入れ、より研究を発展させていきたい。

学び合いの中でも、「伝え合う力」に関しては、児童および教職員へのアンケートの結果を生かしたい。①「しっかり聞いている」と児童は自己評価しているが教師はそうのように評価していない。②「リアクションをしていない」と児童も教師も感じている。③「聞くこと」よりも「話すこと」への児童の自己評価が低い(学年差が大きい)。この理由を考え、場合によっては理由やなぜそれが大切なのかを児童と共に考えながら指導を改善したい。

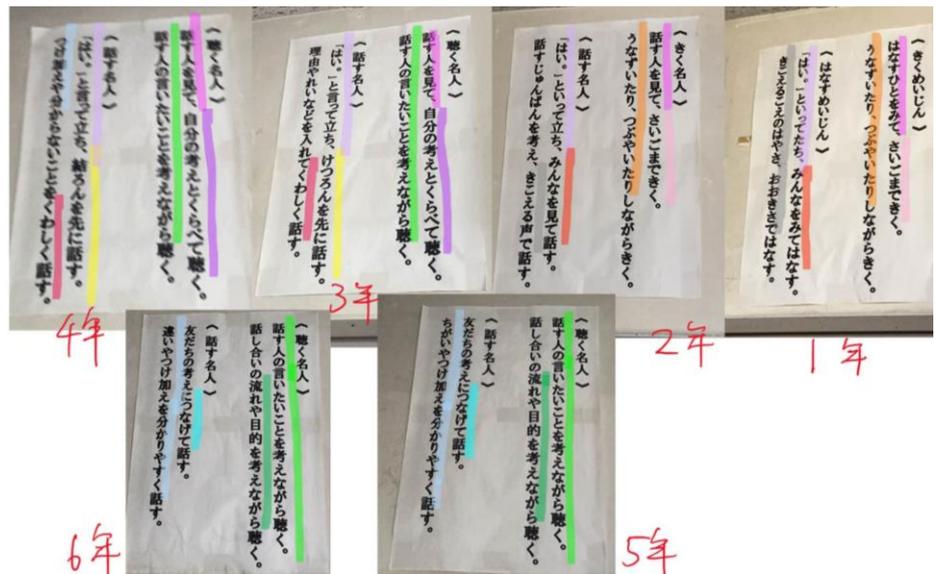


図5 各教室にある掲示物(傍線は筆者による)

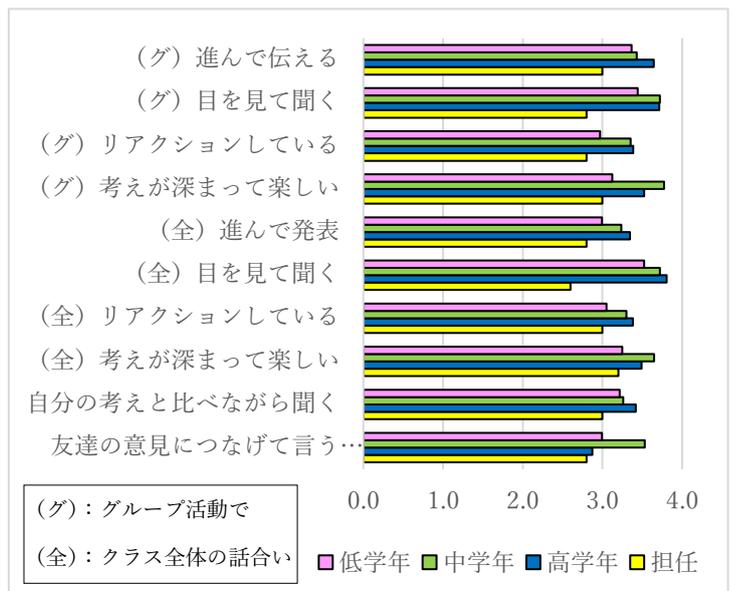


図6 児童・教職員アンケート結果(12月)